
悪の娘・召使

ロンパニール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪の娘・召使

【Nコード】

N1020Y

【作者名】

ロンパニール

【あらすじ】

ある、大きな王国に、双子の姉弟が生まれました。王は、分け隔てなく、二人を愛しました。しかし、女王は、弟は穢れていると言い、レンにだけ冷たくし、レンにだけ愛情を注ぎました。そんなとき、王様死んでしまい、後を追うように女王様も死んでしまいました。

遺言により、王になった姉は、女王に甘やかされたため、ワガママ

に育ってしまいました。そして、好き勝手に政治を始めました。少しでも気に食わないものが居れば、即、断頭台で処刑しました。そんな姉を、召使となった弟は、わが身を汚しても、願いを叶えてあげました……

1・穢れている子

期待の中、城で赤子が生まれた。

知らせを聞いた王は、仕事をほりだし、走って女王のもとに向かった。

女王は、女の子を抱え、微笑んでいた。

それを見た王も微笑んだが、ふと、女王が抱いていない赤子を見つけた。

なぜ、抱かない？と、王が聞くと、女王は言った。

「その子は、穢れているの」

その言葉に、王は怒った。

「穢れている子供などいない！生まれたときから、穢れているなど、あるはずもない！」

と、女王はしぶしぶその子を抱いたが、微笑んではいなかった。

そんな女王をみた王は、女王からその子を取り上げ、優しく抱き、頭を撫でた。

それを見た女王は、不機嫌になり、可愛がっていた子を抱き上げ、愛おしく頬をなでる。

この時から、夫婦の間に、亀裂が入り始めた。

「お父様。お父様のためにつんできました!!」

「おおっ、そうか!はは、レンは優しいいい子だなあ」

そっぴい、王、がくぽはレンを抱っこする。
抱っこされたレンは、嬉しそうに眼を細める。

お父様の匂いは好きだった。
匂いを嗅ぐと、心から安心した。

「ふん・・・そんな穢れている子を抱いて・・・穢れが移るわよ」

「ルカ!!やめないか!!」

「ふんっ。さあ、リン。母様と一緒に美味しいケーキを食べましょ
うね」

「わーい！リン！ケーキ大好き！」

「ふふふ」

レンには決して見せない笑顔を、女王、ルカはリンにだけ向ける。
最初は、言葉が難しく、分からなかったが、最近やっと分かった。

自分は、穢れている・・・お母様にとつたら自分はいらぬ子なの
だと。

しかし、それでもいいと思った。
なぜなら、お父様がいる。双子の自分たちを平等に愛してくれる太
陽のように温かいお父様。

リンも、お父様のことは大好きだ。

「・・・さっ、レン。拙者は忙しいゆえ、相手が出来ぬ。だから、
代わりに大臣と遊んでくればいい」

「うん！..」

「ちよっ！王様！！私はもう歳なんですが・・・」

「はっはっはっ！！運動運動！！！」

気楽に笑う。

たとえ自分よりくらいが低くても、がくぼは友のように話しかける。
そんな彼は、家臣たちからの信頼もあつかった。

しかし、そんな日は長く続かなかった。

がくぼは、不死の病にかかってしまったからだ。

2・王の死

不死の病にかかってしまったがくぼは、日に日に症状がひどくなり、一か月後には、ほとんど食べものも喉に通らず、すっかり病弱してしまった。

レンは毎日看病に行った。

すると、がくぼは力が入らない腕に必死に力を入れて、レンの頭をなでる。

それをされると、レンはもうすぐ大好きなお父様が死んでしまうんだと、考え、涙を流し、甘える。

お父様が死んでしまえば、残る親はお母様しかない。

しかし、お母様は自分に冷たい。お父様が居なくなれば、お母様がこの国で一番偉い人になるのだ。何をしても、文句を言われない。もしかしたら、自分をこの国から追い出そうとするかもしれない。

「お父様あ……僕を一人にしないでよお……いやだよお……」

「……レン……よく聞いてくれ。ルカの国ではな、双子の下の子は、穢れているといわれているんだ。上の子の穢れを、下の子がすべて持つているからだ。信じられているからだ……だが……拙者はそんなもの信じぬ。生まれたときから穢れている子供なんて……どこにもおらぬ……レン……ルカももし死んだときは……リンの近くにいてあげる……お前の唯一の血の繋がってる家族を……」

それだけ言うと、がくぼはゆっくり目を閉じ、動かなくなった。

最初、なぜか分からず動けずにいたが、頭に置いてあるがくぼの手

が、だんだん冷たくいくのを感じ取り、人の死の勉強内容を思い出す。お父様は、死んでしまったのだ。

「お父様・・・だれか・・・！！だれか来て！！」

「どうかしましたか!?!」

部屋の外にいた大臣が直ぐに入ってきて、動かないがくぼを見て、慌てて脈を確かめる。
そして、死んでいるのが分かると、涙を流し、黙ってレンの頭をなでる。

そのあと、すぐにかくぼの葬式がされた。

家臣たちは、涙を流し、優しい、偉大な王にそれぞれ心の中で別れをつげる。

そんななか、ルカだけは笑っていた。

（偉大な王は死んだ・・・これで私がこの国の王・・・これで、やっとあの子を別の場所に移動させられる・・・!!）

赤子を生んだときに入った夫婦の間の亀裂は、もう復元できるものではなかった。

お互い、顔も合わせず、話もせず、10年間いた。

そのため、夫が死んでも、ルカにはどうでもよかった。

彼女が大事なのは、国と、娘だけだった。

穢れている王子など、いらなかった。

「レンを、隣の国に移動させなさい。あの子は穢れている」

「!!!・・・分かりました・・・」

歯をかみしめて返事をする。

大臣の自分の意見さえ、今のルカは通さないだろう。

そんな大臣に、追い打ちをかけるように女王はさらにいう。

「それと、王子の地位を無くします」

「・・・」

言葉が出ない。

おかしい・・・こんなのはおかしい・・・二人とも、この女王から生まれた子供なのに・・・女王にとつたら、自分の子なのに・・・自分の子を絶望に落とそうとする女王・・・
しかし、女王の意見は絶対だ・・・大臣は、怒るのを必死に抑えながら、部屋を出て行った。

「・・・リンと離れるの・・・？嫌だ！！絶対に嫌だ！！」

「申し訳ありません・・・王子・・・私は、何も言えませんでした・

・・だから、そのせめてもの償いに、貴方様を、将来、王女様の召使にしてさしあげます」

「召使・・・？」

「そうです」

大臣は真剣な顔で説明する。

王女の召使となれば一緒にいられる、と、しかし、そのためには大変な努力をして、召使としての知識とマナーを覚えなさいといけないと。女王様が亡くなったらすぐに、絶対に国に召使として戻すと。

まだ10歳の子が耐えられるかどうか不安だったが、分かったと行った王子の目には強い光が宿っていた。その目をみた大臣は、王子なら大丈夫だと思い、その日から、着々と準備を始めた。

3・旅立ち

「では、お母様。行ってきます」

「・・・」

何も声をかけない。女王は安心しているのだう。穢れた我が子が遠くに行くのだ。これでリンに穢れがうつることがない。

ゆっくりと、ルカの口元に笑みが出てくる。

それをみて、レンは馬車に乗る。

(待っててねリン・・・絶対に帰ってくるからね！)

自分が遠くに行くと言った時、リンは泣いた。狂ったように泣きわめいた。そして、なぜ遠くに行くのか問うてきた。レンは正直に言った。自分はお母様に嫌われている。自分は穢れているのだと。だんだんリンの顔が怒りで真っ赤になってくるのをレンは分かっていた。

「そんなのおかしいよ！レンが穢れてるなんて絶対にないわ！だって、リンと一緒に生まれてきたんだから。だから、リンって穢れてるはずよ！なのに・・・！なのにいっ！！」

さらに涙を流す。リンは今まで知らなかったらしい。それもそのは

ずだ。ルカはリンをレンに近づけさせない様にしていたし、レンのことを口にすることさえいやだと言っていたはずだ。

最後までリンは嫌だいやだと泣いていたが、レンが絶対に帰ってくるから笑って見送つてというのと、リンは必死に涙を止め、笑ってくれた。

今も、笑顔で手を振ってくれている。
家臣たちも笑顔で見送る。

(さようならじゃない・・・行つてきますだ・・・)

息を吸い、大声でいう。

「行つてきまーんーんーす!!」

そういうと、家臣たちは礼をしてくれた。リンは「いつてらっしやい」と言ってくれた。

リンたちが見えなくなるまでレンは手を振り続けた。

しかし、見えなくなると、顔を暗くして、席に座る。

今からは楽しいことばかりではない、むしろ、つらいことだらけだ。短期間で召使の仕事などを覚えなければいけない。しかし、レンはほかにも考えていた。

それは剣術だ。剣術があれば、もしリンが危険な目にあつても守つてあげれる。

さらにつらい毎日あるけれど、リンのためだと思えばそんなの全然

辛くない。自分は王子なのだ、できる。やれる！

「よつこそ、レン」

笑顔で出迎えてくれたのは、茶色の髪をした女性だった。彼女は賢く、強く、召使のことと、剣術の両方を教えてくれるらしい。てつきり、勉強は厳しそうな老人、剣術は恐ろしく大きな男を想像していたのだが、全然違った。メイコ、という名の先生は若く、とても優しそうに見えた。

「よろしくお願いします」

「んっ、礼儀正しい子ね。でも、勉強の方はともかく、剣術の方は厳しいわよ？つらいけど、がんばれるかしら？」

疑う目で見てくる。しかし、レンはしっかりとした声で答える。

「ハイ。大切な姉を護るためなら・・・なんでもできます！」

「・・・強い子ね・・・いいわ！気に入った！きちんと分かりやすく教えてあげるから安心しなさい。最初は剣になれないといけないから、こればつかしは時間はかかるけど、後は楽だと思っわ。がんばりましようね」

「はいっ、ありがとうございます」

キッチンと礼をする。彼女、メイコには、レンは普通の少年として迎え、接するようにと女王から命令が下っている。しかし、メイコは言われなくてもそうするつもりだった。

「直ぐにはじめましょうか」

「はい」

背筋を伸ばしてついてくるレンを見て、メイコはクスリッと笑う。
この子はずいぶん聡い子だ。勉強の方は問題ないだろう。剣術のほ
うも、かなり上達するだろう。

（久しぶりに教え甲斐のある教え子が来たわね・・・）

この子には自分の出来る限りのことをしてあげよう。
そう思い、メイコは足を進める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1020y/>

悪の娘・召使

2011年12月1日21時50分発行